

# PhotoStage

PhotoCulture

## ● CONTENTS ●

<インタビュー>大沢利裕・下藺詠子 / 訪問・写真銀行.com / 第2回フォトブックグランプリ / 林久夫讃岳写真展 / フォトテクノの仕事 / 写真で元気いっぱい / ギャラリーで立ち話 / 写真展アラカルト / ギャラリーらんだむ / DMギャラリー / 12月写真展スケジュール

# 12



富士フィルムフォトサロン  
内野志織写真展「オーロラシンフォニー」

フレームマン・ギンザ・サロン  
林久夫讃岳写真展「利尻山 彩北の孤峰」



アイテムフォトギャラリー「シリウス」  
「はたらくすがた」2010入選作品展



ニコンサロンの新宿  
宮高奈美写真展「Wonder Drug」

月刊フォトステージ no.95 ¥200 (税込・送料別)

## 大沢利裕写真展「ザトウクジラ～故郷への回遊～」

# 揺れブレと格闘して見たこともない瞬間に賭ける

誰でも見たこともないような写真を撮りたい、アツと思わせたい。しかし、そうした写真を撮るためには地道な努力が欠かせない。しっかりと基本を守り自分なりの工夫を凝らして、見たこともないようなザトウクジラを撮っているのが大沢利裕さん。銀座のアートグラフで個展を開くのを機会にザトウクジラの思いと写真を語ってもらった。

大沢さんは個展ははじめてで、ザトウクジラを撮りはじめて9年になる。なぜザトウクジラなのか。「その9年前に、悩みごとがあって、地球上最大の哺乳動物であるクジラを見たら、悩みなんてちっぽけ、人生が変わるのではないかと思ったのがきっかけでしたが、別になににも変わりませんでした。」と振り返りながら苦笑する。

そしてザトウクジラに興味を持って調べてみた。「沖縄の慶良間諸島、ハワイ、小笠原で見られるということで、ハワイは大きな船で行くので近くまで寄れない、小笠原はいまほど遭遇

率が良くなかったと記憶しています。慶良間は出たら98%ぐらい会える。というわけで、すぐに撮影に行きました」と行動は敏速だ。

「ザトウクジラは大人になると15m、30トンといわれていて、一番大きいのがシロナガスクジラで30mで150トンぐらいになります。大型クジラは7種類いて、ザトウクジラも入っています。中でも一番アクションするのがザトウです。シロナガスは泳いで逃げるだけで面白くないです。ザトウは若いほど好奇心があるようで寄ってきます。船の下を潜ったり顔を出したりジャンプしたりします。慶良間諸島・座間味島に座間味村ホエールウォッチング協会があり、遭遇率が高いのは、朝から山の上で見張っており、クジラが出ると連絡が入ってウォッチング船が出ます」

大沢さんは現役のエンジニア。撮影は「休暇をとって行きます。夜中に着いて島に3～4日滞在します。年2回は行っています。季節はメインが1～3月ですが、実際は年末ごろから来て5月ぐらいまでいるザトウもいます。夏は北のアラスカ、ベーリング海峡、カムチャッカ



大沢利裕さん

半島近海にいて、冬に繁殖のため下ってきます。ザトウは北のほうでしか食事をしないそうです。南に來ると断食状態で30トンあった体重が10トン減っているといます。3月ごろになるとオスは痩せてきます。メスは太ったままですが、その理由は分かりません」とすっかりクジラ通になっている。

そして撮影の話に入ると「撮影ではあまり超望遠レンズは使えません。船が揺れて重いものを扱えないからです。通常は70～200mmの望遠レンズにテレコンバーターを付けて最大400～500mmにして撮ります。9年前はフィルムでしたが、デジタルを使い始めて5年になります。やはりデジタルのほうがズーム倍率を上げられるから撮りやすい。とにかく揺れるときはすごい揺れて、すっ飛ばすような揺れなんです。フェリーでも撮れなかったことがありました。現在はクルーザーが主ですが、あくまでウォッチング目的であって、私のように撮影のために船が出ているわけで



水面から飛び上がった感動の瞬間

はありません。今回の写真展ではここ4年ほど撮りためた写真を展示する意向です。それはそれ以前のは伸ばせないからです。なにが違うかといいますと、シャッタースピードが速くとれないので、ブレてしまっています。現在は1/4000秒でも撮れますから、それならA1ぐらいまで伸ばせますが、昔のISO100のフィルムで撮った作品はA4がいいところです。出品する点数は34点。サイズはA1を2枚とあとは半切です

DMの写真は、水面から水飛沫とともに飛び上がっているザトウクジラ。「こういうのは水面から出てからカメラを構えても間に合いません。私はまずそのクジラがなにかのアクションをやるかどうか判断するのです。しないとと思ったら、カメラを置いて休んでいます、なにかをするなと思ったら、カメラを構えピントを合わせて待機状態です。それを予測するのが経験なんです、身体を固定し揺れを補正しつつ出たと見たら、そこにカメラを振りますが、その範囲はせいぜい目の前の90度ぐらいです。このくらいならどこに出ても撮れます。500mmのレンズは画角が5度しかありません。もし1度ずれたら画面から外れてしまいます。船は左右で20度以上は揺れていますから、5度の画角の中に入れる補正する技術も不可欠です」

またなにより船長のクジラが次にどこに出るかを予測して船を寄せる技術と経験、及び撮影者の撮影技術と経験があってこそ良い写真が撮れるのだと思い

ます。「現在のカメラの装備は3.3kgになります。これはいつも撮っている重さでさほどたえませんが、昔スキーを撮っていた時にずっと構えていて、手が震えだしたらもう撮れませんでした。基本は休むことですが、疲れにくいコツもあります。2時間ぐらいだったら手を抜きながらも構えていられますよ」と自信をちらり。

ザトウクジラの写真は、大沢さんの話のように決定的瞬間が多い。フィギュアスケートのイナバウワーのような格好をして跳ねているザトウもいる。羽のように水面から出た尾びれの写真はよくあるが、あれは比較的誰にでも撮れる、イルカがまとわりつくとクジラは嫌がるのか、またザトウが20頭も集まっている写真もある。まさにクジラ好きやネイチャー派にとって興奮ものである。

「写真は高校時代に撮っていて、大学に入ってからはやめてしまい、それからスキーに凝って、11年ぐらい前からまた写真をはじめました。基本はスナップで、撮影の幅を広げるためにいろいろなものを撮るようになりました。写真展を開く動機は、3年ぐらい前からやりたくなくなっていました。開く以上は、これはすごい、というのではないと納得できませんから、まとめるのに時間がかかりました。年に1回クジラ展というのがあって、そこには各界のクジラの専門家が集いますが、私は毎年写真を出品していますから、これからもザトウクジラを撮り続けていくことになるでしょう」

＝ CONTENTS ＝

<インタビュー>

●大沢利裕写真展「ザトウクジラ～故郷への回遊～」/2-3

●下園詠子写真展「きずな」/30-31

●いち押し写真展・ニコンサロン/4

●クローズアップ・林久夫讃岳写真展/5

●フォトブックを楽しもう・第2回コンテスト/9

●気になる写真展アラカルト/10

●訪問・写真銀行.com/11

●DMギャラリー/15

●ギャラリーで立ち話/16-17

●話題・フォトテクノの仕事/19

●ギャラリーらんだむ/22-23

●近況・廣瀬日出雄さん登場/25

●ギャラリーアドレス&アクセス/28

●インフォメーション/29

<スケジュール>

新宿スケジュール/6-7

銀座スケジュール/12-13

区内スケジュール/20-21

都下近県スケジュール/26-27

◎編集部から◎次号発行は12月25日。1月の写真展スケジュールやイベントなどの情報をお早めにお送りください。できる限りご掲載いたします。写真展の写真データの添付もお忘れなくお願いします。メールでもお知らせください。